

語學の講座の施設有るや、其圖書館に現存の佛教原典の數十種及び佛教言語學の語彙十數種の果して藏せられあるやの疑はる、佛教各宗の大學、専門學校を中心とせざる悲運なる佛教學界宿世の願であらう。

幸に吾人は此世界的文化事業として計企せられたるものが、日本佛教文化の爲に偏狹なる私情に由つて穢損せらるゝこと無く、大法の導くまゝに眞摯に進歩せられ、以て佛教研究維新の實現を期待して止まざるに共に、此難事業の遂行に確信を以て當らんせせらるゝ、光壽會の功勞に衷心感謝する。(益)

●大乘教理學會々報

大乘教理學會は大乘教理の研究及それに關聯せる學術の研究を目的とし、佛教々學の本質を表現せんが爲佐々木、金子兩教授の指導の許に組織せる學會なり。本會が創設以來開催せる公開講演は左の如し。

第一回。大正八年十月二日。於第二教室、

佛華嚴三昧に就て

金子教授

大方廣佛華嚴經の表現せる所は佛の華嚴三昧の内容にしてその三昧の意義を明す爲に本經を分拆解剖し、本經は一の叢書的に組織せられたるものを指摘し大無量壽經との内面的交渉あることを明かにして論を結ばれたり。

教授數名學生八十名出席。

第二回。十月十五日。於第一教室、

華嚴の修道の研究

河野教授

華嚴は從來教義の宗教にして純粹の論理と思惟にて行くべきものといふ從來の研究の妄を指摘し、行のなき宗教

は無價値なりと論じ、華嚴の上に表現せられたるものは善財童子の物語を中心とする「入法界品」なりと論ぜられたり。

金子、寺本兩教授其他學生凡そ二十名出席。

第三回。十一月十二日。於第二教室、

龍天二師の教學の交渉 佐々木教授

佛教々理史上に於て文殊の空觀系統の教學と彌勒の瑜伽系統の教學とを交渉して一體系を組織せる最初のものは、曇鸞の論註にして、次には賢首之を試み、最後に我日本にて親鸞聖人の眞宗であるを論じてその梗概を明し、最後に於て龍樹の研究を出發して我が眞宗の宗學に幾多の問題を暗示せられたり。

南條學長、稻葉、金子、赤沼、廣瀨、源、安藤の諸教授其他學生四十名出席。

第四回。九年三月二日。於第二教室、

觀心と觀佛 稻葉教授

この講演の梗概は別項所載の同教授の論文あれば略す。

佐々木、金子教授外學生凡そ三十名出席、

—以上— (椎名、物部)

●佛教史學會々報

本會の目的は佛教史に關する研究にして毎學期一回以上研究發表の例會を開き、傍ら佛教研究に貴重なる史料にして未だ世に知れざるものを戊午叢書と稱して逐次刊行してをる。最近開催の例會は左の如くである。

三月三日(水)午後三時より第二教室に於て

秋篠僧正に就て

日下 無倫君

氏は先づ奈良朝時代の佛教を概説し、次いで秋篠寺の善珠僧正の俗姓、その學系、その傳記、及び行業より著書に論及し、就中玄昉僧正の操行に就いての史家の誤を訂し(是一)、法相宗に於ける『南北兩寺傳』なる名稱の起原を尋ね(是二)、その僧正拜命の年時に就て延暦十四年説の是なる所以を證明し(是三)、更に御靈神社創立の由來(是四)を述べ、最後に奈良朝時代に於ける願生思想の大要(是五)等有益なる研究を約二時間に亘つて縷々開陳せられた。聽講者は山田教授、藤原幹事以下十名許りにて極めて寥々たりしは遺憾であつた。猶近く吾人は「史學」なるもの、根本概念を得んが爲に斯學の泰斗阪口博士の

講話を聞く豫定にして時日は多分四月下旬になるであらう。

△戊午叢書の既刊書目左の如くである。

(1) 法水分流記 再版。西山派見編

本書は永和四年西山深草流の靜見が勸録したもので、

今までの法然上人門下の諸流の系譜中最古のものと思はれてゐた『蓮門宗派』よりも百五十年以前にできたものである。その史的價値の大なるこゝは山田教授の解説に詳しい。

(2) 玄義分抄 成覺房幸西著

成覺坊幸西の著書は久しく湮滅したものとと思はれてゐたが本書は近頃慧空講師の藏本中より發見せられたもので、その内容等に就いては嘗て『無盡燈』第二十卷第二第三兩號に山上正尊氏の研究が出てをつたから今更喋々しない。

(3) 蓮如上人一期記付拾塵記

『一期記』原本は東本願寺内事務局藏、『拾塵記』は河内願得寺所藏。共に著書實悟尊老の自筆の稿本である。卷末に稻葉昌丸氏の精細なる解説及び『一期記』と『御一代聞

書』連署記』『空善日記』『仰條々連々聞書』この對照表が載せてある。

因みに戊午叢書は便宜上市内東六條護法館にてその頒布を取扱つてをる。(藤井、上杉)

會告

『佛教研究』は年四回刊行毎號百五十頁と定め居り候も、一ヶ年の總頁數六百頁以内に於て時にはその刊行回數を變更致す場合も可有之こと、豫め御承知置願ひ上候。本年度の如きも、創刊號に於て既に豫定の頁數を超過致し候のみならず四月に創行仕りし事に候へば、四回刊行は到底困難のこと、存じ候。本年度は四月、七月、十一月の三回にて總頁數六百頁を滿し度覺悟に御座候間、何卒其の趣御諒察なし下され、御愛讀願ひ上候。